

盆の高燈籠…P1 そびえたつ瓦屋根 西新井大師の大本堂…P2 お化け煙突60年
⑩晩年の建物配置…P3 はい、文化財係です番外編 田ヶ谷家の舟…P4

足立史談

第678号

2024年8月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集部
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

盆の高燈籠

たかどうろう

郷土博物館



盆の高燈籠

【写真1】足立区舎人

佐藤高氏撮影

お盆には、先祖の霊を祭るさまざ
まな設えが行われます。現在では見
られなくなってしまうものも多く、
その様子を撮影された佐藤高氏（品
川区文化財保護審議会委員）の写真

から盆の高燈籠を紹介します。

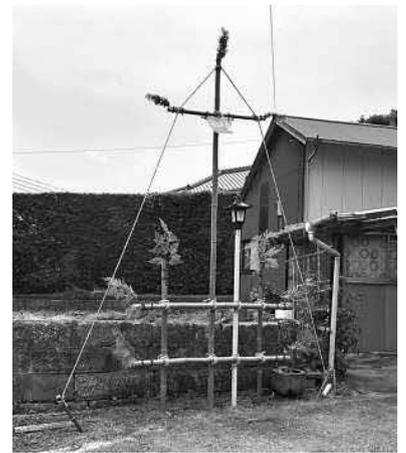
亡くなった人が四十九日の忌
明けを過ぎて迎える初めてのお
盆を新盆といい、とりわけ手厚
く盆行事が行われます。高燈籠
とは、新盆の家がその家の庭や
玄関前に建てるもので、亡くな
った方の霊が初めて家に帰るの
に迷わないように目印とするも
のと言われます。【写真1】稲

を干す木であるトネリコやハンノ
木の木材の先に、杉の葉を結び付け、
高さが二〜三メートルほどにもなる
大きなものです。

■**燈籠立て** 八月一日は釜の口とよ
び、この日の早朝、まだ日の昇らな
いうちに、身内が集まり燈籠建てを
行います。燈籠は木製で、縄をつけ
て上げ下げができ、お盆が終るまで
毎夕灯りを灯します。八月いっぱい
立てておき九月一日にかたづけらる家
もありました。

また、ブリキ製の燈籠もあり、こ
れは下部に杭の先をさして使います。
区内舎人の墓地に建てられている様
子を佐藤氏が撮影しています。

■**鋸南町の外飾り** 【写真2】は、
現在千葉県の鋸南町で行われている
高燈籠です。千葉県の内房地域で営
業している葬儀社が請け負って建て
ているようで、会社のホームページ
によると、「新盆の外飾り」と呼ん
でいます。木製の燈籠を下げるもの



【写真2】新盆の外飾り
鋸南町保田 2022年7月4日撮影

を「野灯籠」とよび、写真のように杭
の先に付けるものをその形からか「ガ
ス灯」とよんでいます。十字に高く組
んだところに、白い布が付けられてい
ますが、これはかつて江戸川区などで
見られた新盆旗とよばれる梵字を書い
た白い布の付け方と同じです。

千葉県の外飾りは新盆の一年限り
ではなく、二年目は真中の長い竹を
外し二段の竹だけにして燈籠を下げ、
三年目は、一段の竹にして下げと、
形を変えながら三年間建てます。

この会社では、男性スタッフが限
られた日にちで七〇軒ほどの外飾り
を建てるようです。六〇センチメー
トルほど掘り込んだり、長い竹を用
意したりと、その労力や手立ては大
変です。かつては、家々が自力で行
っていた地元の習俗を、労力や資材
の整った葬儀社がプランとして提供
して伝える形になっており、需要も
あるようです。

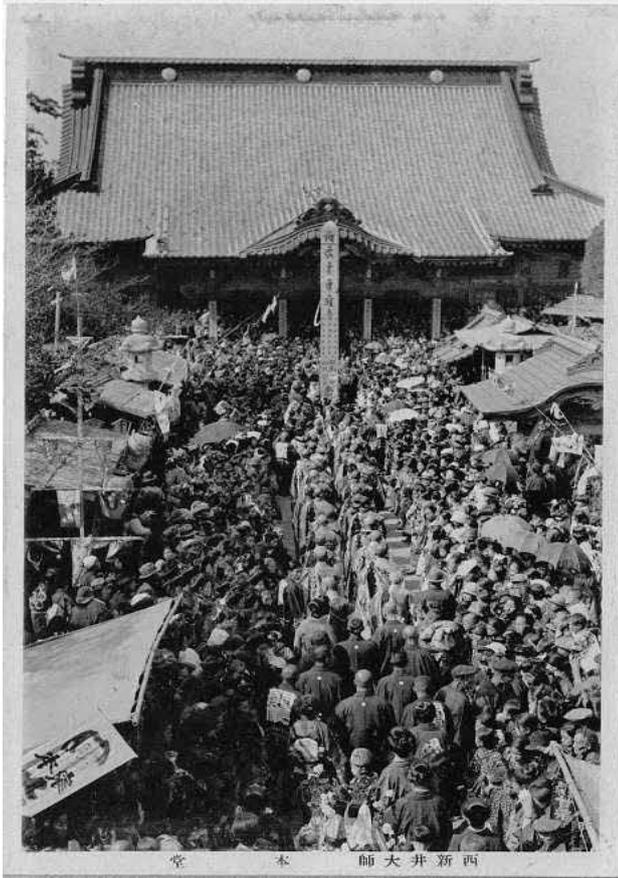
そびえたつ瓦屋根 西新井大師の大本堂

郷土博物館

足立の名所として知られているのが、西新井大師とよばれる五智山遍照院總持寺です。なかでも大本堂は建て変わりながら、その時代を象徴する建物として多くの人々に親しまれています。そこで今回は西新井大師の大本堂に注目してご紹介しましょう。

1 江戸の木造大本堂

■瓦葺の大建築 かつての西新井大師の本堂は木造の大本堂でした。江戸時代の建立です。文政期（一八二



【写真1】「西新井大師 本堂」の写真はがき

山門から撮影したと思われる写真。雑踏が印象的です。僧侶の列が本堂に向かい「開帳」と記した半纏や稚児が見えることから21日のご開帳日のいずれかと考えられる。昭和4年頃と推定 個人蔵

〇年代)の「江戸名所図会」では茅葺きで描かれています。が慶応四年(一八六八)の浮世絵ではすでに瓦葺きの本堂で描かれています。江戸後期の建築です。

大きな瓦屋根は印象的だったため、いくつかの文献に登場します。その一つとして文豪・田山花袋の一文をご紹介します。

：西新井という小駅がある。北千住の次駅である。この小さな田間の停車場が時には人で埋(うず)まることがあるのであるから、以ていかにこの大師の流行仏であるかということが想像することが出来る。そこから、田圃の中をぬけて僅かに六七町の距離で、汽車の

中からも、その大きな祠堂の瓦葺(がこう)を指(ゆびさ)すことが出来る。：

※田山花袋『東京の近郊―一日二日の旅―』(磯部甲陽堂、大正九・一九二〇年)

瓦葺とはそびえ立つ瓦屋根のこと。花袋が『新撰名勝地誌』や『日本一周』などで好んで用いた表現です。

【写真1】の御開帳のときの本堂ですが回向柱(本堂の前の角柱)に「昭和四年」(一九二九)との文字があるので、この年あたりに発行された写真はがきと推定されます。

境内の雑踏は、まさに立錫の余地無く参詣客で埋まっています。花袋の紹介では川崎大師とともに「厄除けの流行仏」とあり門前の賑わいとともにご紹介されています。

この木造大本堂は、太平洋戦争の戦火も耐えましたが昭和四一年五月二四日の午後十一時頃に火災で失われました。当時の新聞記事を見ると、ご本尊など寺宝は無事だったことも記されています。

2 昭和の名建築

瓦葺きの大本堂というイメージは、現在の大本堂でも感じることができます。



【写真2】木造意匠折衷型の大本堂

続いて現在の大本堂を見てみましょう。■木造意匠折衷型 現在の大本堂は近代和風建築の名手、吉田五十八の弟子として知られる大近代和風建築関徹の設計、昭和四六年(一九七一)建設、翌四七年落慶法要という昭和の名建築です。鉄筋コンクリート造(RC造)で、木造意匠を取り入れた木造意匠折衷型という形式です。屋根は入母屋鍔葺き(いりもやしころぶき)でどっしりとした安定感がある壮麗な姿をしています。

【写真2】 平成二〇年(二〇〇八)には耐震改修が行われ、災害発生時にも安心できるようにとの願いから、ゴムやオイルダンパーなどによる免震構造も取り入れられた最新の耐震建築となっています。

お化け煙突60年 ⑬

晩年の建物配置
格和宏典

■晩年の建物配置 守衛所のある正門から、入って左側に事務棟、倉庫、厚生棟、独身寮、家族寮、社宅が連なり、お稲荷さんが鎮座していました。左側には診療所、分析室、発電所本館、屋外変電所、技術事務棟、汽缶係の交替勤務者詰所（仮眠室併設）、工作係室、作業係室などがあり、隅田川に面して貯炭場、石炭殻の灰処理場があり、隅田川岸壁には石炭満載のだるま船から荷揚げするためのクレーン3基が据え付けられていました。

娯楽室には書籍・囲碁・将棋・麻雀などが備えられていました。

(3) 稲荷神社：墨堤通り近くに鎮座し、毎年二月の午の日にお祭りが行われました。

(4) 診療所：嘱託医と社員の看護婦さんがいました。

(5) 分析室：石炭や重油の成分分析を行い、納品物が妥当であるか検査していました。

(6) 発電所本館：ボイラー・タービン・電気の発電設備が設置してありました。

(7) 技術事務棟：技術次長・技術的な諸業務を行う所員が入っていました。

(8) 汽缶係詰所：ボイラーの操作・保守を行う交代勤務者用（仮眠室併設）。汽機・電気の交替勤務者の詰所・仮眠室は本館建物内にありました。

(9) 工作係室：設備の保守・点検を行う所員の事務所でした。

(10) 作業係室：燃料関係を扱う所員の事務所でした。

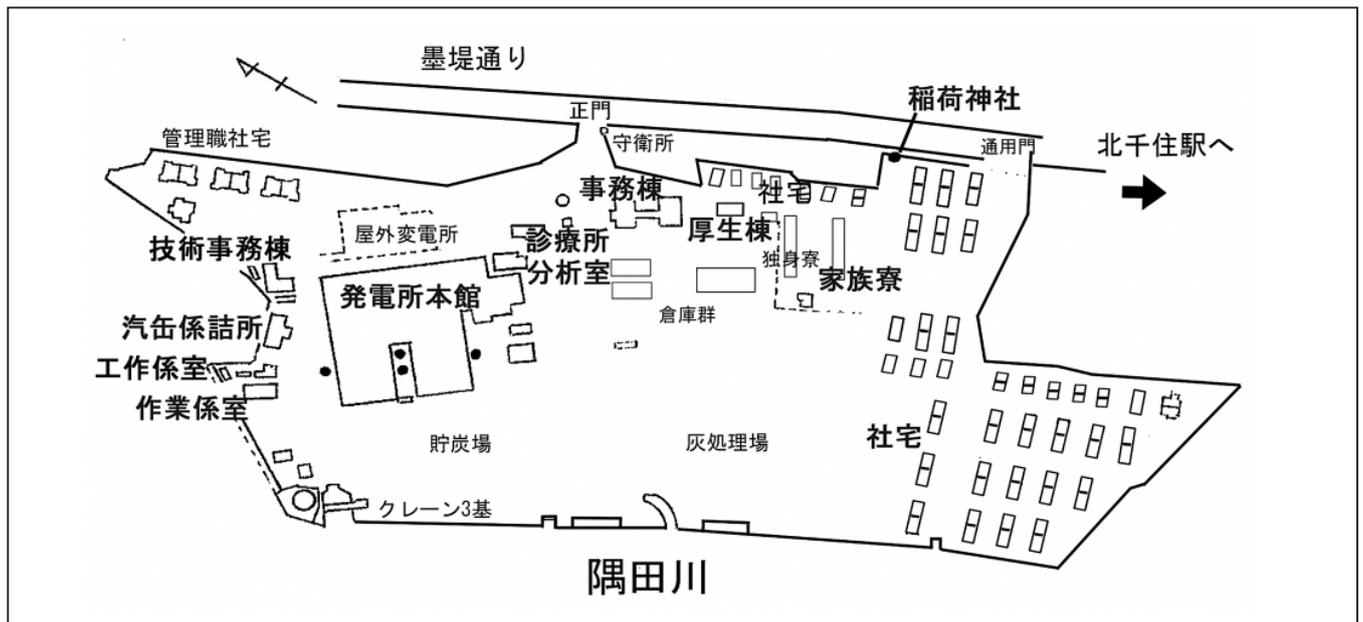
(11) 社宅：社宅が多いのは、事故などでの緊急対応時に社員を素早く招集するためであり、事務所の近くに社宅を設置していました。このた

め、技術係の入居を優先し、事務職は、社宅に余裕が生じた場合のみ入居できました。このシステムは、火力発電所のみではなく、水力・送電・変電などの設備を有する事業所に適用されましたが、時代とともに設備が無人化となり、道路なども整備されマイカー時代とともに設備に付随する社宅は減少しました。

墨堤通りの東側に社宅の通用門がありました。

(12) 家族寮：独身寮の隣りに二階建てが一棟あり、新婚者や小家族が入寮していました。

一・二階に簡易炊事場付六畳が五室、二階に炊事場なしの四畳半が一室ありました。一階にトイレと洗濯場がありました。（元千住火力発電所職員）



発電所建物配置図 千住火力発電所設備概要より作成

はい、文化財係です — 番外編 —
田ヶ谷家の舟



前号で、明治四十三年八月の関東大水害と荒川放水路のことをご紹介しました。今回は、それに関係した舟をご紹介します。

高橋美紀様から、解体する扇一丁目の田ヶ谷家の屋敷に保管してある舟について文化財係にお電話をいただき、六月六日に筆者が緊急調査に



うかがいました。今回は、その調査結果のご紹介です。当日は、高橋様のおじにあたる田ヶ谷康弘様にも様々なことをご教示いただきました。

ちなみに、康弘様は、ご幼少の頃に起こった水害の時、実際にこの舟に乗ったご経験があるそうで、水につかった大人が後ろから舟を押していた記憶があるとおっしゃっていました。

■田ヶ谷家の舟 田ヶ谷家は、もととは、荒川沿いにあったそうですが、放水路の建設に伴い現在地に移転したそうです。その広い敷地の中に、覆い屋をかけ、舟が保管してありました。全長約三・六メートル、幅約九〇センチ、深さ約四〇センチの舟で、杉から造られています。杉は舟の材料として多用されていました。かつて田ヶ谷家には二艘あったそうで、保管されている舟は小さい方だったといえます。

一般的にこうした舟は、水害発生に備えて二階や壁などに吊るしておくことから、上げ舟と呼ばれていま



上：全景
 下：舟正面から

す。田ヶ谷家でも二階に舟を吊っていたとのこと、水害常襲地帯の生活の知恵をうかがえます。ただし、田ヶ谷家では単に舟と言っていたそうです。

■舟の解説 写真にも写っています。舟の側に立て札があり、解説が書いてあります。どなたがお書きになったかはつきりませんが、今から三〇〜四〇年前には大分腐食が進み字も薄くなっていたそうで、字を塗りなおし、防錆加工を施して現在に至ったとのこと。貴重な解説なので、原文のまま掲載します。

舟

荒川放水路が出来る以前はこの附近一帯しばしば大洪水にみまわられていたので舟が命の綱であった

この舟は明治四拾貳年に埼玉県榎戸村^{※1}の舟大工により地木の杉を用いて建造された

明治四拾参年八月の大洪水の時西新井村役場の依頼により千住仲組の米問屋(すゞ子^{※2})より興野町の氷川神社へ米拾参俵(當時吉儀は七拾キロ)を積み舟頭貳名が乗り御用舟として運搬した事がある

その後大正八年荒川放水路の完成により不用となったが荒川放水路の葦の採取に使われていた

関東大水害の前にもたびたび水害は起こっており、有名なところでは明治四十年の水害があります。その水害から二年後にこの舟は作られたことがわかります。そして、造られた場所が荒川の上流にある埼玉県榎戸村(鴻巣市)であることもわかります。榎戸村で造られた後、荒川を下ってきたのでしょうか。こうした舟は、造られた年代や場所がわからないことが多いので、大変貴重な情報と言えます。

■関東大水害で活躍した舟 さらに興味深いのは、関東大水害の際に、西新井村役場の依頼を受けて千住仲組の米問屋から興野の氷川神社まで米を運んだということが記されていることです。筆者は水害の際に、舟が重要な物資輸送手段として活躍したことを記す当時の文書は見たことがありますが、実際に使用された舟を見るのは初めてでした。

屋敷の解体に伴い舟も解体となりましたが、お二人から記録を残せてよかったですとおっしゃっていただきました。貴重な情報をお寄せ下さった高橋美紀様・田ヶ谷康弘様に深く感謝申し上げます。

※1 当時は合併して吹上村

※2 文意より閉じ括弧を補った。
 (佐藤貴浩・文化財係学芸員)